

【火の心臓】 花火の日

まち子

負けてはならない、と思った。臆してはならない。ひとたびも譲ってはならない。ひるまず踏ん張り、祈るように勝利を信じ続けなければならない。しかし祈りはすぐに脅しになり、「落ちたら許さへんで」と呪詛のようにつぶやく自分のすぐ隣で「頑張れ」と懸命に祈っている幕之内の汗だくの顔が、その必死な目が、炎の芯よりもまぶしい。

千堂は子供のころから線香花火が苦手だった。他の手持ち花火はいくら振り回しても消えないのに、線香花火は少しでも動いたらすぐに火が地面に落ちてしまう。それに線香花火を手に取る時間というのは決まって他の花火を消費し終えた後で、食事というなら食後のお茶、午後五時の町内放送、蛍の光、騒がしくて楽し時間は終わり、という合図。あとは静かに、終わりとゆく宴を惜しまなければならない。こよりの先に火がつき始めると子供たちは車座になってしゃがみ、小さくてはかない火の玉を言葉もなく見つめる。動かずにじっとしていられたらご褒美のように火花が散り、少しでも落ち着きがないと火はあつと

いう間に地面に落ちて黒い煤になる。あーあ、落ちてもうた、と明るい声でこぼしても、ささやかな花火大会に魅せられて半開きになった口からは笑い声が返ってこない。

大人になったからといって線香花火が得意になったかといえばまったくそうではなく、火が落ちるのを待つだけあの時間を好きになれないことは変わらない。合宿の夜、こっそり抜け出して手持ち花火で遊んだときも線香花火を星に全部押しつけて自分は勢いよく炎が噴き出る花火でアスファルトに猫の絵を描いていた千堂だ。成人して何年経っても何も変わらない。

「あ、千堂さん、ライター持ってますか？ ボクタバコ吸わないので持ち歩いてないんですよ。よければ買いに行きますけど」「行かんでええ。ワイも吸わんが、これは持ってる」

尻のポケットから着火用のガスライターを取り出す。少し前に墓参りに行ったばかりだから使い方を思い出すまでもない。幕之内がセットしたろうそくの芯に火をつけ、形を変えながら踊り狂っているオレンジ色の炎をしばらく見つめる。

「……風、強いですね、やっぱり」

「そやな」

「本当にやるんですか？ 手持ち花火とはいえ危ないですよ」

「やる。キサマかてこのまま何もなしで帰れへんやろが」

「いえ、帰れますが……。だってまた来月来るわけですし」

「来月やったらあかんのや。花火は今日しかできひん」

幕之内は眉を下げた困り顔を向けてくる。

それはある夏、ヴォルグが世界を獲って半年ほど経ったところ、そして幕之内の二度目の負け試合の少し後のことだ。

ヴォルグの初防衛戦をテレビで観戦しよう、と誘ってきたのは珍しく幕之内の方だった。律儀にも事前「前回は東京に来てもらったので今度はそちらに行く」と電話をかけてきて、試合が始まるきつちり一時間前にジムに来た。日付を間違えていたことに気づいたのは、幕之内からの手みやげを不思議そうに受け取った柳岡に指摘されたときだ。ヴォルグの初防衛戦は一ヶ月後で、今回は東海岸で行われるから時間も違う。しかし千堂はそのことを責めはしなかったし、笑いもしなかった。肩を落としてとんぼ帰りしようとする幕之内に「今日このへんで花火大会やるさかい、見てから帰ったらええがな」と言って引き留めさえた。慰めるためではない。自分自身が彼の落ち込んだ顔を見たくなかっただけだ。だが、

「直前で中止になってしまっただけだ。台風でもないのにこんなに強い風が吹いてるなんて」

返事をする前に、びゅお、と音をさせて生ぬるい風が二人の

体の合間を駆け抜けていった。ろうそくの小さな火も冗談みたいに揺れて、なかなか花火に点火しない。

「あかん。この風どうにかせえへんと火いつかんわ。キサマ風止められへんか」

「無理です。というか、打ち上げ花火が中止になるくらい風の手持ち花火もするべきじゃないと思いますよ」

「いや、やる。今日は全国的に花火の日なんやで。風ごときであきらめてもうたらあかん日や」

「全国的に……？ 本当ですかそれ？」

「おう。さつきワイが決めた。ほんまにデカイ花火大会の日やつたんや、全然おかしくないがな」

幕之内の体を盾にし、ろうそくの火を安定させてから噴き出し花火に点火させる。小気味のいい音を立てて火花を散らす火花を見て、驚いた様子の幕之内に視線を移す。自分が得意顔になっっている自覚は、じゅうぶんにある。

「でけたやろ？ 花火でも何でも、ようは根性なんや。すぐあきらめたらあかんで」

「いい話みたいに言ってますけど、危ないことには変わりないですからね。少し火花を離してください。火傷しちゃいますよ」
手首をつかまれ、火を川の方へと向けられる。風に散らされたまぶしい火花が真っ黒な川面へと吸い込まれていく。

「ありがとうございます」

耳元で風が鳴り続ける中、幕之内が小さな声でそう言った。

「文句言ってしまったけれど、千堂さんはボクのためにこんなことしてくれてるんですよね。花火の日だなんて無理のある嘘についてまで。元々日付を勘違いしたのはボクの方なのに」

幕之内は乾いた照れ笑いを浮かべてうつむく。

「ゴンザレスさんとの試合の後、こういうことが増えた気がするんです。仕事の時間を間違ってたりと、家やジムの中を歩いて壁にぶつかったりとか。でもまさか大阪まで来てやらかしてしまうとは思ってませんでした。本当に申し訳ないです」

笑い話を装ってはいたが、声の小ささのせいやけに真剣な告白に聞こえた。嫌な予感がした。何か深刻なことを打ち明けられそうな気がした。幕之内の手を振りほどき、いっとう派手そうな花火に火を移す。炎が滝のように噴き出る花火を幕之内に持たせて、自分はさらに二本の花火に着火する。

「両手持ちや。景気ええやろ」

「それ、鷹村さんがやってました。最後には何十本も持ってましたよ。指に挟めるだけ挟んで、さらに口にもくわえて」

「あの人にはかなわんのお」

あはは、ときっきのことを忘れたみたいに笑う幕之内を見て胸が痛んだ。もし不安をこぼす相手として自分が選ばれたのなら

らはぐらかしたりなんてすべきではなかった。自分たちは同じジムの仲間ではないし、家族でも友人でもない。幕之内の性格からして近しい仲なら心配をかけまいとして何も言えないだろうから、そこそこ事情を知っていても特に近しくない千堂は秘密を打ち明けるのにうってつけの相手だったはずだ。

「すぐ消えちゃうんじゃないかと思ってましたけど、けっこうちゃんと花火できますね」

幕之内の短くて太い髪は強すぎる風になびき、手でかき回されたかのようになっていた。千堂の髪はさらにひどく乱れている。それを整えようとせず、にっと笑って幕之内に向き直り、花火を持つていない方の手で肩を乱暴に叩く。

「そやろ。何でもやってみるまでは分からへんのや」

「そう……かもしれせん。うん、そうです。そうですよきつと」
花火から花火へと次々に火を移動させていき、川からくんだ水に漬けた残骸はどんどん増えていく。深刻になりそうな話はそれきりで、その後の話題は子供のころの花火の思い出とヴォルグのことばかりだった。お互いのキャリアの話も、お互いの試合の話も、幕之内の再起戦の話も、健康に関する話もなし。
「あとは線香花火だけになっちゃいましたね。でもこの風じゃ厳しそうだし、また後日にしませんか？ 来月も来ますから」
「逃げる気なんか？」

大袋の中から十本入りの線香花火を取り出して、半分を幕之内に手渡し。

「ええか。これは勝負や。逃げたらあかん。最後までワイと戦れ」
「戦って、線香花火で……？ どうやって……？」

「そら、先に落ちた方が負けやがな。公平に五本勝負。どや？」
そんなあ、ともごもごつぶやき、ため息をつきながらもうその前にしゃがむ。幕之内は昔からこうだった。搦め手も駆け引きも誘惑も必要ない。真正面から挑みさえすれば逃げない。懷に飛び込んでくる相手の率直な態度には何よりも弱い男だ。

同時にこよりの先に火をつけ、片手で風を遮りつつ勝負のゆくすえを見守る。一本目は風のせいか、あつという間に幕之内の火が落ちた。千堂はもう少しだけ保ったが、線香花火を楽しむにはあまりにも条件が悪い。互いに膝を突き合わせるくらいまで近づいて風が入ってこれない場所を作り、おそろおそろ二本目に火をつけると、今度は少し長く耐えた。二つの火球から可憐な火花が散り、むき出しの膝に当たる。意外に熱くてぎゃあ、と叫んで飛び上がると火がぼたりと落ちる。しかし長ズボンの幕之内は涼しい顔のまま、微動だにしない。

「……今回はボクの勝ち、ですな」

小声でそう宣言し、幕之内は困ったような顔をしながらもまっすぐに千堂を見てきた。彼の瞳には少しだけ火がともって

いた。どうだ、と言いたげな目。幕之内自身はみじんもそんなことを考えていないだろうが、何年も彼を見てきた千堂にはその目の意味も価値も分かる。

その後の二本も、最初の二本とほとんど同じ展開になった。火傷を防ぐべく幕之内との距離を取ったとたん同時に線香花火が風で吹き消され、仕方なく近づくともまた火花がすねに散って尻餅をついて火が落ちた。この不毛な繰り返しを終わらせるには、風がやむことを祈るか熱いのを我慢するかしかない。

「脚、火傷しちゃってませんか？ ボクだけ丈の長いズボンじゃ不公平ですから着替えてきてくださってもかまいませんよ」

勝者の余裕とでもいうべき言葉だ。千堂は一瞬間ぎしりをし、吐き捨てるようにこう言った。

「人の心配しとる場合かいな。勝負はまだ終わつとらんのだ」
「でも、これでもう終わったようなものだと思いますよ。千堂さんが勝ったとしてもお互い二勝で引き分けですし……」

ぐぬう、とうなり、首を絞めなくなるのを必死にこらえる。

「さてはポイントで勝つてるとして油断してるな？ 甘すぎんぞ。最後の一本で必ずキサマをKOしたるわ」

「KOなんてルールさつきまでありませんでしたよね!? 後出して変えないでくださいよ！」

「KO率百パーの男が四の五の言うもんやないぞ」

「それとこれとは話が別です!」

とはいえ彼は二分とごね続けられない性格だから、無理やり花火に着火してやるとすぐに黙った。動きを止め、呼吸を止め、目を見開いて火の中心を見つめる。負けれない、という心の声が伝わってくる。そうだ。負けてはならない。臆してはならない。譲ってはならない。足を踏ん張り、祈るように脅すように火をにらみつける。幕之内が「頑張れ」とささやく。その必死すぎる声に思わず目線を上げ、幕之内の汗ばんだ顔を見る。風が強くても真夏の夜の空気は生ぬるくて、汗が絶え間なくにじんでいる。小指の爪先ほどもない火の玉を見つめ続ける濡れた瞳、縫いつけられたみたいに結ばれた口元、凶悪なパンチを放つ筋肉を盛り上げている緊張。幕之内の本気の目に、気が遠くなりそうなくらいの引力を感じる。彼がその瞳を、すべての神経を、すべての欲望を自分に向けたときのことを思い出す。千堂は何年もそれを忘れられないでいる。それしか考えられない人間になり、遠くにいても彼がどんな状態か、彼が何を考えているのか想像してばかりいる。まるで自分のことのように。自分以上の存在であるかのように。

「……あー!」

と、幕之内が叫んだ瞬間、千堂の線香花火が音もなく闇の中へと落ちた。反射的に幕之内の花火の先を確認したが、そっち

はまだしつかりついている。

「終電! 忘れてました! どうしよう、間に合うかなあ」

つい数秒前まで何より大事なものであったはずの線香花火をバケツに放り、幕之内は荷物の中からデジタル時計を取り出した。九時、四十五分……もう無理ですね」

そう言っただけで肩を落とし、荷物を持って丸石だらけの河原から立ち上がる。

「千堂さん、このあたりで東京までの夜行バスが出てるところご存じないですか? ボク明日の朝には帰らないと」

「キサマ、そないな卑怯な男やったんか?」

頼りない紙切れと化した線香花火を握りしめたまま立ち上がり、幕之内の目の前に立つ。

「デカい声出して勝って満足なんか? ああ? 見損なつたで」

「はあ? いえ、あの、ですから、終電の時間がですね……」

「男と男の勝負より終電の方が大事なんか?」

自分でも百パーセント言いがかりとは思えない文句だが、素直に「すみません」と頭を下げられる。

「最後のはボクのKO負けにしてください。ルールが分かりませんけど、これで千堂さんの勝ちになるんですね? おめでとうございます。でもとりあえず今は夜行バスの乗り場を、」

「知らん」

そう言つてふいと横を向く。別に意地悪をしているわけではない。本当に知らないのだ。千堂はせっかちな性格だから思い立つてすぐに飛び乗れる新幹線を選びがちになる。

「そ、そう、ですか……。分かりました」

「すまんの」

「大丈夫です。自分で探します。なのでこのへんで失礼します。片づけを手伝えなくて申し訳ないです。それではまた来月」

ひどく早口で他人行儀な言い方だ。目も合わない。腹を立てているというよりは、早く一人になったような空気を感ずる。おかげでピンときた。彼は自分を恥じている。またしてもうっかり時間を忘れてしまったことを気にしている。「ゴンザレスさんとの試合の後、こういうことが増えた気がするんです」。

考えるより前に手が出た。線香花火をつまんだままだった右手を伸ばし、腕を幕之内の肩に回して即座に肘を曲げる。驚いてこっちを見たときにはもう逃げられないようになっていた。

「えっ、ちょっと、あの、千堂さんっ!」

案の定、幕之内は目を丸くして千堂の腕と顔を交互に見た。

「逃がさへんで」

「はい? いま何て?」

「勝ち逃げは許さへん。もういつべん勝負せえ」

「話聞いてました? 線香花火の続きは次にしてください。ポ

クはどうしても今日帰らないといけないんです」

幕之内は腕のなかでもぞもぞと動き、どうにかして逃れようとしている。千堂の気を悪くしそうなほどの力はこもっていないが、形だけの抵抗と呼べるほどでもない。ただひたすらにたくなで、それでも他人への気遣いがやめられなくて、それは自分が傷つきたくないがための盾のようなものかもしれない。至近距離から見る幕之内の大きな目はまるで風にゆらめく火の玉だ。乱暴に扱ったら落ちてしまうのに、火だから直接は触れない。今の幕之内に「どうしてそんなに不安そうなのか」と聞ける人間はこの世に一人もないだろう。家族でも友人でも仲間でも、火傷をしない距離から彼を見つめ、最後まで美しい火花を散らせるよう気遣ったり応援したり見守ったり呪ったりするのが関の山で、わざわざ炎の芯に触れようとする命知らずの阿呆などどこにもいない。

千堂の腕の中であらがっている幕之内の肩を押さえ、風のように素早く耳元に唇を寄せる。幕之内は息がかかったとたん大げさにけいれんし、ますます身を固くする。まるでヤドカリだ。「心配あらへんで」

できるだけ能天気な声でそう言うと、短い吐息が返ってくる。

「電車なんぞ逃してもどうにかなるがな。それよりも花火や。今日は花火の日やて言うたやろ? コンビニで花火買うてくる

さかい、早よやって勝負の続きしよや」

彼の瞳の火が踊るように揺れる。動揺を伝えるように揺れる。

「ありがとうございます、気を遣ってください」

いつの間にかおとなしくなっていた幕之内は、不安定な声色でそう言った。

「何かと顔色をうかがわせてしまつて申し訳ないです。でももう大丈夫ですからボクのことなんて気にしないで、いつもの千堂さんらしくしててください。……と言いたいところですけど、千堂さんがボクの動向を気にするのは当たり前ですね。たとえ運がよかっただけでも、一度ならず勝つてしまつたボクには勝ち続ける責任がある。なのにまた、」

そのらしくもない告白は途中でブラックホールに呑み込まれたように途切れた。幕之内のこんな姿を目にしたのは初めてだった。これは打ち明け話だろうか。それともこれも彼自身を守る盾なのだろうか。自分たちは互いの一歩いいときしか知らない間柄だから、こんなときどうしたらいいか分からない。いつも上機嫌で、いつもボクシングのことしか考えていない顔で、ボクシング以外に必要なものなどなかった十九のころから何も変わっていないみたいにしか振る舞えない。

「……すみません。変なこと言っちゃいました。忘れてください」
恥ずかしそうな愛想笑いを浮かべ、幕之内は軽く頬を掻いた。

その仕草をひどくよそよそしく感じた。その顔は当人にしか分からない秘密と事情を抱え込んだまま歩き続けなければならない一人の見知らぬ他人のものだった。自分たちは互いの一歩いいときしか知らない間柄だ。けれど、だからこそ、たった一人で月面に置き去りにされたような気持ちになった。

喉元にこみ上げてくる疎外感吐息に変わり、怒りに変わり、痛みに変わり、衝動に変わった。

それはしなくてもいいことだった。だが今までそうしたいと思つたことがないわけではなかった。再起戦はどうするんだと聞いたら不安そうな顔をされたとき、マットに沈む姿を見て自分が否定されたような気分になったとき、どんどん変わっていく彼のことをなすすべもなく受け入れるしかないと思つたとき、腕を伸ばしてまぶしい炎の芯を握りつぶして治らない火傷を負いたいと思つた。不意をついて抱き寄せて、かさついた唇にキスして、彼の火に少しでも触れたかった。

んん、という小さな驚きの声が聞こえ、すぐに体を離す。幕之内は無表情のまま固まっている。何が起つたかを呑み込むのに苦労しているところなのだろう。

「あ、あの、」

「すまん。ついやってもうた。せやけどちようどええんちゃう？ どうせ終電ないんやろ？ パツとどこか入ってサツとやって、」

ほんでそのまま始発待ったらええやん。付き合うたるわ」

「やるって何を？」

声も顔もこわばっている。その口元にもう一度唇を寄せ、触れる寸前で止まる。

「分かんか？」

「わ、分かりません。どうして少しいつもと違うことを話した程度でそんな展開になるんでしょうか。だってボクらは何と違うか、そういうことをするような間柄ではないわけで……」

「何や、分かつとるやんけ」

にやと笑い、口を半開きにして目を白黒させている幕之内の顔を思う存分眺めやる。

「気が乗らんやつたら別にええんやで。バスか何か知らんがそのまんま帰ったらええ。始発を待つ気やつたらワイんちにも泊めたる。どないする？ ついてくるか帰るんか、早よ決めえや」

幕之内は誰の目から見ても動揺していたが、赤面してはいなかった。真面目な男だからもつとあわてるかと思っていたが、予想よりもずっと冷静だった。彼にとつて誰かに自分の心のうちを明かすことは、知り合いと肉体関係を持つことよりもずっとずっと重大なことなのかもしれない。だったらキスをしたり裸で抱き合ったりしたところで、赤の他人である自分が火傷を負うことなどできないのかもしれない。なかった。

やがて幕之内は顔を上げ、真剣な瞳で千堂を見つめた。ぱち、と火の玉が弾けた音が聞こえた気がした。炎を宿した目。視線を向けただけで周囲を引火させる火。千堂を何年も熟狂させてきたその火。

気が変わらないうちに早くそのへんのホテルにでも何でも入りたかったが、花火の残骸と川の水を詰め込んだバケツを持っていたせいで結局自宅まで歩かないとならなくなった。

すでに寝ている祖母を起こさないようにそろそろと歩いて自室まで移動し、ふすまを開けて真つ暗な室内に幕之内を招き入れる。彼はシャワーを浴びたい、とは言わなかった。明かりをつけるか消すかの問答もしなかった。代わりにすさまじい力で引き寄せられて抱きすくめられた。こんなに強く抱きしめられたら普通の人間は背骨と命の心配をする。たしなめようと拳で背中を叩くと、幕之内が細かく震えているのが分かった。

「千堂さん」

顔をうずめたままだからか、声がぐぐもって聞こえづらい。

「ボク、その、こういうことしたことがないんです。ですから何をするにしろ、きつとご満足いただけないと思います」

「経験とかご満足とかそんな関係あらへん。お互い思いっき

りやったらええだけや。ワイにはいつも通りのことやろ」

「全然いつも通りじゃないですよ！」

小さくため息をつき、幕之内のポリウムのある股間を握りしめる。瞬時に体が跳ね、どす、と音が響く。

「や、やめ、」

「何や、キサマどえらいもん持つとるやんか。さすがやな」

まだ芯を持ち始めた程度だろに、片手に余るくらいの大きさだ。幕之内は顔を赤らめ、背すじを丸めて縮こまっている。

「こないなデカいちんぽ持つとる男がいつまでもじもじするもんやないで。やりたいからついてきたんやろが。覚悟決めえ」

さらに体積を増したそれを突つきながら唇を奪い、角度を変えながら感触を楽しむ。最初は緊張のせいか力が入っているが、キスに慣れてくると湿って柔らかくなる。歯の間に舌を差し込むと肩で息をし始め、次第にあえぎになっていく。その間にも股間はおそろしく膨らみ、ズボンを突き破りそうになっている。

「服」

じゅ、と音を立てて唇の間から唾液を吸い取ると、幕之内は筋肉で盛り上がった腕にいつせいに鳥肌を立てた。

「脱げや。お前の望み通りにしたる」

興奮のまま幕之内の体を突き飛ばし、自分も一枚ずつ服に手をかけていく。破きそうになりながらTシャツをはぎ取り、汗

と川からの風で湿ったハーフパンツと下着をもどかしく脱ぎ去る。お互いボクサーだから裸を見たことくらいはあるが、腹につきそうなほど勃起した性器を見せ合ったことはない。

同じく丸裸になった幕之内は千堂が何か言う前に胴体に抱きつき、がむしやらに口づけてきた。テクニクも自信も、遠慮も気遣いもないキスだった。ただ力任せに貪るだけ。そんなことをされるとこつちも遠慮らしきものは頭から吹っ飛んで、二度も自分を屈服させたこの男を泣かせたくなってくる。

不器用なキスを続けているうちに立つていられなくなり、畳の上に座り込む。どちらがどちらに覆いかぶさるかでひとしきり揉め、主導権を握るべく汗が浮かんだ上半身にキスを落としたり始めると、幕之内は身を固くしておとなしくなった。生まれて初めて人間に撫でられることを許した野良猫のようだ。

弾力のある筋肉を包んでいる素肌に歯を立てたいのをこらえ、煽るように愛撫を繰り返していく。見るたびに目を奪われずにはいられない肉体の隅々にまで触れて、口づけて、にじんだ汗を舐め取っていく。出会う前から焦がれてやまなかつた拳にもキスをし、太くて短い指を一本一本舐めしゃぶり、硬い関節のしわのひとつひとつをざらざらした舌でこそげ取るようにたどっていると、幕之内はついに音を上げた。切羽詰まった声で「千堂さん」とささやき、たまらなそうに体を起こす。

「すぐ、気持ちいいです」

まるで試合中のようにあはあと息を荒げながら口元にキスをされる。あわてて吸うものだから下品な音が立つ。

「当たり前なんですけど、今まで生きてて人にこんなことされたことなくて。すぐ気持ちいいです。ありがとうございます」

「のんきに礼言うところ場合かいな。まだこんなもんやないで」

唇を吸い合いながら硬くなりきっている性器に触れると、幕之内は素っ頓狂な声をあげて体を震わせた。そのまま背を丸め、唾液をたっぶり含んだ口でその巨大すぎるものをくわえ込む。舌を動かすとあえぎのような悲鳴のような命乞いのような声がひっきりなしに鳴り響く。よほどじつとしてられないのか両手で執拗に頭を撫でられ、耳と頬をたどられ、あまりのくすぐったさに目線だけで咎めると、幕之内は目の端に涙をにじませながら声もなく達した。熱い太ももが岩のように硬くなり、足先が丸まって何度も畳を掻く。吐精のたびに恥ずかしそうに嗚咽し、千堂の体を引き剥がそうとするかのように両腕が突つ張る。勢いよく噴き出した精液は彼自身の腹や胸やあごに飛び、真っ赤に染まった見事な裸体を惜しげもなく汚していく。

それはこの目で見る必要も、誰かに見せる必要もないはずの姿だった。その光景を目にした瞬間、幕之内の丸まった肩を抱き寄せた理由が、青ざめて力のない唇にキスをせずにはいられ

なかった理由がようやく分かった気がした。

「……せん、どうさん」

整わない呼吸の合間に、かすれた声で呼ばれる。

「すぐ、気持ちよかったです。なので、交代させてください。ボクなんかに同じことができるとは思いませんけど、ボクなりに一生懸命真似してみますから」

「いらん。そんなん待つてられへん」

「はい？」

おずおずと股間に伸ばされた手を振り払い、がむしやりに幕之内の体を畳の上に押し倒して馬乗りになる。頭が真っ白になったまま浅く上下する胸に両手をつき、何年も焦がれてやまなかった男が持つ肉体をまじまじと見つめる。

弾力のある、質のいい筋肉。限界まで酸素を取り込める深い呼吸。彼自身の意志がなければ押ししてもびくともしない、強すぎる体幹。人のいい笑顔、いつも素直に赤くなる頬、いつでも自信のなさそうな眉、何かを言いたげな口元、火のような目。敵意も悪意も恐怖も灰にする白い炎の目。やがて温度が下がって赤くなり、黒くなり、煤となって落ちていくであろう目。その目が好きだった。「好き」では済まされないほどその目に引き寄せられ、煽られ、打ちのめされ、縛られ、夢中にさせられてきた。まだ落ちてくれるかと必死で祈りながら、その目の火

の玉が、彼の人生が作り出すささやかな花火大会を見つめ続けてきた。けれど千堂は線香花火が苦手だ。じつと静かに見守っていることはできないし、終わりを感じながら平常心でいることもできない。かといって火の玉が落ちないように押さえておくことも、最初から線香花火などに手を出さないこともできない。どんなに強く願っても、どんなに頭を絞っても、どんなにがむしやらに行動しても、無力でいることしかできない。

「幕之内」

すがりつくように両腕を取り、拳に軽く口づける。

「もうキサマの息の根止めるまで収まらん。ええなう」

「息の根っ!？」

幕之内があわてて体を起こしたせいで、額と額が思いきりぶつかって視界に火花が散る。

「いっ……、いったい何をする気が知りませんが、殺すのは勘弁してもらえませんか。ライセンス剥奪されてしまいますし、ボクの方もまだやり残したことがたくさんありまして……」

「やり残したこと何なんや」

足を開かせ、柔らかくない尻たぶを思いきりつかむと幕之内が小さく声をあげた。

「そ、それは、その、もっと仕事を頑張って母を楽にするとか、飼いだの面倒を最後までみるとか、会長に恩返しをするとか」

「それだけなんかな？」

分厚い肉の隙間に指を押し込み、燃えるように熱い粘膜を遠慮なく探っていく。

「いっ……たくな。でも変な感じがします。何だろう、これ」「耐えられへんのやったらこらで降参せえ。ちんぽが入ったら変じゃ済まんさかいな。ほんで？ やり残したこと何や」

幕之内は答えない。体の力を抜き、目を閉じて集中し、初めての行為に戸惑いながらも精いっぱい指の感触を味わおうとしている。つくづく強い男だと思う。覚悟などしてなかっただろうに、これからここをセックスに使われることを恐怖だとも屈辱だとも思っていないらしい。それどころか、

「……千堂さん、あの、何だか、」

その熱っぽいささやき声とともに、中が少しずつあたたかくなっただけで伝わってきたのが伝わってきた。やがて足が落ち着きなく動き始め、指に吸いつくように締めつけてくる。こらえきれないあえぎが半開きの口から漏れ出る。ぐくりと唾を呑み込み、指を引き抜いてのしかかる。そして開かせた足の間に割り込んで乱暴に腰をぶつけ、簡単に入るわけもない場所にペニスを押しつけて、先走り気味の欲望に背すじを震わせる。

目の色が変わっている自覚はあった。幕之内は千堂がどんな突飛なことをして振り回しても困るだけで恐れない。それどこ

るか最初からそれを望んでいたかのように振る舞うことさえある。そんなとき心臓の真ん中から震えが走り、我を忘れそうになる。欲望を肯定されたような感覚。自分がもう一人増えたみたいなき感覚。もしかしたら、世間ではそれを「受容」と呼ぶのかもしれない。一人じゃないと実感すること。

「入れるで。もうあかん言うてもやめられへん。ええな？」

「いいですよ。どうぞ」

「氣い抜ける返事すな。ビニール袋にもらいもんのみかん入れるんとちゃうで」

「ボクなりに覚悟は決めています。ですからどうぞ」

太ももの裏を押さえつけ、ぐ、と力を入れて先端を中に押し込む。すると幕之内は限界まで眉をひそめて呼吸を止めた。腫が超高温の炎だ。耐えられるところまで耐えてやる、という心の声が聞こえてくるようだった。

「痛いんやろ」

「大、丈夫です。まだまだいけます」

「我慢せんでええ。いっぺん抜くか？ もっと馴らしてからの方がええかもしれへんで」

「氣遣いはけっこうです！ ボクは本当に大丈夫ですから！」

千堂の両腕をつかんで引き寄せ、幕之内はふーっ、と怒ったように息を吐いた。

負けてはならない。臆してはならない。譲ってはならない。

河原でのことを、リングの上でのことを、出会ったころのことを思い出して笑みが漏れ、膝裏を固定しつつもう少しだけ腰を進めていく。

中はひどく狭い。つくりが小さいというよりは、肉厚で弾力があるせいで力をこめて穿つても跳ね返されそうになる。入ったら入ったで今度は早く射精しろとばかりに締めつけてくるせいで氣遣ったり笑ったりする余裕がなくなつて、ひたすら耐えるだけになり果てている。眉間にしわを寄せ、一秒たりとも千堂の目から視線を外さない幕之内の目をにらみ返す。こっちはだつて負けられない。幕之内の本氣にじゅうぶん応えられるまでは、そして見事に打ち倒して降参させて泣かせて許しを乞わせるまでは絶対に終われない。

激しく憎み合う敵か熱く愛し合う恋人同士のようにひたと見つめ合いながら先に進んでいき、弾力と幕之内の反応を確かめながら揺り動かす。あまり派手には動かせないから内壁をこねる程度だ。それでも奥を突かれるとよほど辛いのか、幕之内は脂汗を流しながらさらに強く千堂をにらみどくる。視線だけで殺されそうなほどだが、彼はそんなことを思つてやしないだろ

う。ただひたすら負けたくないのだ。千堂に背中を見せたくないだけ。今の幕之内の目には、千堂しか映っていない。あのと
きみたいに。

「こんなときでもおんなじ目しよるな、お前は」

挿入をわずかに浅くし、角度をつけて押し込む。幕之内はぐう、と苦しそうなうなり声をあげる。

「せやかてあんまし無理すな。歩けんようになるで。明日朝イチで帰って練習せなあかんのやろ」

「こ、心配なく。元々夏が終わるまで激しいトレーニングはしないつもりですから」

「夏が終わるまで……？ 何でや。怪我でもしとるんか。そないなこと聞いとらんでこっちは」

萎えきっている性器をそつとつかみ、励ますように撫でる。

「けつ、怪我はしてません。事情があるんです。そ、それよりもそこ、触られると何か変です。気持ちよくなっちゃいそうで」

手の中の巨大なものが硬くなるのと同時に、緊迫していた表情がゆがんでいく。対抗心が燃えさかっていた目もみるみるうちに潤み、代わりに期待と快楽が浮き出てくる。腰を細かく動かして中をこねながら刺激すると幕之内はあつという間に白旗を揚げ、ふたたび上半身になつぷり精液を飛び散らせて達した。その間もその後、千堂のものをくわえ込んでいる部分は魚の

口のようにゆるんだり締まったりして搾り取ろうとするかのように複雑に動いている。

「すみ、ません。だめでした。でもまだ全然いけますから、遠慮しないでどんと来てください」

こっちがあかんのや、と心の中でつぶやきつつ、何度も深呼吸を繰り返して圧を逃す。これほど熱い壁に包まれてぎゅうぎゅうに締めつけられて射精してしまわない男はこの世にいない。が、ここで音を上げようものなら幕之内に肩すかしだと思われることは必至だ。

「……負けられへん」

下唇を思いきり噛みしめ、さつきと同じ場所を突くと、幕之内は腰を震わせてあえいだ。気持ちいい、もつとしてほしい、と吐息が言っている。彼自身の精液にまみれた胸に手を伸ばし、硬く尖っている部分を転がし、下腹を撫で、またしても芯を持ち始めた性器を愛撫する。体を触っているうちに、心臓を突き上げられるようにこう思った。キスしたい。唇に頬にあごに額に何度もキスを落として聞き捨てならないセリフを耳元でささやいて、目を閉じて快楽に浸っている幕之内のまぶたを開かせたい。もう一度まっすぐに見つめ合いたい。恐れも照れも恥も
なく。

千堂さん、というのどに詰まったような叫びが聞こえたかと

思うと、幕之内は目を開けてまっすぐに千堂の顔を見て、鼻にかかった声であえぎながら全身を震わせて果てた。そして息も整わないうちに体を起こし、繋がったままがむしやりに抱きついてくる。そのままキスしたそうに背を伸ばして顔を上げ、しかし唇には届かないからあごや首に猛烈なキスの雨を降らせる。痕が残るほどの強さだ。一方的に印をつけられていることが我慢ならなくなつてこめかみや額に口づけ、火傷みたいな色の痕を残していく。お互いこれから外を歩くときは苦労するだろう。冬ならまだ隠しようがあるが、夏では絆創膏くらいいしさがまかす手段がない。

唾液が枯れ果てそうになるまで痕を残し合っていると、じわじわと全身があたたかく痺れて射精欲に耐えられなくなつてきた。幕之内も同じ感覚を味わっているのか、切なげに腰を揺り動かしながら両脚を絡めてくる。しかしすぐに起き上がったままの体勢を維持できなくなつて畳の上に倒れ込み、赤く腫れ上がった自分の性器を雑な手つきで愛撫している。その手を包んでのしかかり、本能のままに腰を振っていると、幕之内はあごを反らせて悲痛に叫んだ。

「……い、ですー」

「何やって？」

「もっと、ボクシングが、したい、です！　今、ボクがやり残

していること！」

幕之内は涙声でいく、と宣言し、上に乗っている千堂を跳ね飛ばしそうなほどびくびくとけいれんして達した。千堂の方はというと精液どころか脳みそまで吸い尽くされそうだったが何とかぎりぎりの中から引き抜き、幕之内の湿った陰毛の上に射精した。たぶん人生で一番の量だ。

「き、もち、」

はああああ、と同時にあえぎ混じりの息を吐き、幕之内は完全に脱力して畳に身をゆだねた。

「よかった……。死んじゃうかと思いました。千堂さんのすごく大きいし、エッチなことでもっとこう、恥ずかしかったり痛かったりうまくいかなかったりするものなんだと思つてましたけど、こんなにスムーズに気持ちよくなれるものなんですね」
「……そら、キサマが頑丈に生んでもろたおかげやろな。親に感謝せなあかんで」

「母のことが今の話とどう関係があるんですか？」

ため息をついて幕之内の横に寝そべり、その不思議そうな顔に軽く口づける。幕之内もくすぐったそうに息を漏らしつつ同じことをやり返してくる。

「ま、こつちもなかなかよかったで。ガンガン突かれても泣き入らんとこはさすがや」

「そ、そうですか、こういう意味がよく分かりませんが、喜んでいただけてよかったです。でもボクの方は圧倒されてしまつて何もできませんでした。申し訳ない」

「やったやろ。やりすぎなくらいやったやろ。よう見てみい。明日外歩かれへんわ」

頭を反らせて首すじを見せる。自分では見えないが、真つ赤な吸い痕がびつしりとついているはずだ。

「うわあ……。すみません。少しキスしただけでこんな風になつちやうとは思いませんでした。どうしたらいいんでしょう」

「どうしたらもこうしたらもあらへんわ。風ん中で花火しとつたら火傷した、て言うしかないやろな。お前もそう言うとき」

「はあ……」

ピンときていない顔だ。自分の顔に同じものがついているとは思っていないらしい。

「とにかく、申し訳ないです。うまく加減ができなくて」

「謝らんでええわ。加減してもうたらもう思いつきできひん」
ティッシュで幕之内の体を拭いながら唇に吸いつく。キスのしすぎで赤く腫れているが、それもお互い様だろう。

「せやかてもうここではあかんな。次はラブホ行つて足腰立たんようになるまでやるで」

「次!? またする気なんですか？」

幕之内は驚いた声でそう言ったが、真剣味はない。そもそも本気で心外だと思つていたらキスに応えるわけがない。

「キサマまだまだ全力とちやうやろが。ワイもや。せやけどここで全力出したらばあちゃん起こしてまう」

「あ、あの。エッチなことつてそんな全力でするものなんですか……? 足腰立たなくなつたら仕事に差し支えるんですが」
「やつてみたないんか、全力で。キサマのスタミナに付き合える奴なんぞそうそうおらんで」

ごく、と唾を呑む音がした。

「来月また来るんやろ。そんなとき息の根止まるまでやろうや。ヴォルグの試合見た後やつたらまたどつき合うてもうて最初からボロボロになつとるかもしれへんが」

「……いえ、やつぱりダメです」

胸の前で両手を握り、幕之内は弱々しい声でそう言った。

「せっかく言つてくださったのに申し訳ないんですけど、ボクはいま先のことを考えずに行動できる状態ではないんです。千堂さんと勢いのまま勝手にスバーしたりとか遊んだりとかエッチなことしたりとかしてる場合じゃなくて……」

そのまま幕之内の目の中に、線香花火の火の玉が戻ってくる。ぼんやり明るい夏の夜にぼつんと浮かぶ、消えかけの小さな丸い火が。

千堂は深くため息をつき、幕之内の鎖骨に額を乗せた。分かっていたことではあった。近づいてもキスをして裸で抱き合っても恋人同士のように振る舞っても、彼の火に触れることなんてできやしない。こっちが勝手にひどい火傷を負っただけだ。二度と治らない傷、生きている限り疼き続ける痕、超高温の火の記憶。幕之内は胸元にある千堂の頭をそっと抱き、ささやき声でこう言う。

「でも今日は楽しかったです。こういう表現はちよつと変かも知れませんが、本当に楽しかったです。何だか……そう、時間が戻ったみたいです」

腕を伸ばして幕之内の体を抱き返し、背中に手を回す。

「ボクは、もつとあのときみたいにボクシングがしたいです。先のことなんて考えられないくらい、我を忘れて、心から楽しいつて思えるくらいに。ボクがやり残していることなんて、本当はたぶんそれだけです」

背中に当てた手で拳を作る。千堂は線香花火が苦手で、静かに見守ることも、火の玉が落ちないようにすることも最初から線香花火に手を出さないこともできないし、何をどうしようと無力でいることしかできないけれど、拳を作ることだけではできない。自分が拳を握ることは花火の趨勢とは何の関係もないし特に役にも立たないが、唯一それだけ是可以。

「……来月、必ず顔見せえよ。キサマがおったら我慢だけへんようになるかもしれんが、息の根だけは止まらんようにしたる」
「そ、そうですか。ちなみにそれはその、何についてのお話なんでしょう。花火ですか？ スパー？ それとも、」
「夏が終わってもうたらもう花火はせえへん。スパーもあきらめる。試合見るときは星を間に挟んどくさかい、盛り上がってもうどうにかなるやろ」

困惑している幕之内の顔にキスを落とし、腰を抱く。

「せやけどこっちは無理や。次会ったら耐えられへん」

「ボクも、たぶん、そうです。でも、」

「『でも』はいらん。遠慮もいらん。ワイらはただ花火の火をつけ合うだけや。その何が悪い？」

いきなり強く抱きしめられ、またしても背骨と命の危険を感じた。消えゆく花火の力強さではない。

ふ、と笑い、火の玉をすり潰すほどの力で抱き返して二人でごろごろと畳の上を転がる。幕之内は困ったように笑いながら唇を重ね合わせてくる。千堂は線香花火が苦手だ。消えようと消えまいと関係ないと笑っていられる強さだけを愛している。

(おわり)